モンテーニュと「汝自身を知れ」

山　本　佳　生

はじめに

『エセー』[1] 第二巻 12 章「レーモン・スボンの弁護」において、いかなる知識や理性的判断も定立するのが難しいということをモンテーニュ（1533-1592）は明確にした。また、人間の知識は、現世では完成を見ることなく、常に不完全である、というのがアリストテレス『形而上学』冒頭の解釈として、ルネサンス期に広く共有されていた[2]。そこでモンテーニュは、第三巻 13 章「経験について」のなかで、エラスムスやラブレーのようにプラトンや聖書の伝統に立ち戻るのではなく、「自分自身」の探求に着手した。では、その探求とは具体的にどのようなものなのか見ていきたいと思う。

1. アポロンの忠告

「私はほかのどの主題よりも自分を研究する。これが私の形而上学であり、自然学である Je m'estudie plus qu'autre subject. C'est ma metaphisique, c'est ma phisique」[3] と宣言し、書物における知識も、自分自身のなかに十分見出しうる、とモンテーニュは述べる。こうした考えは次のような確信に基づいている。すなわち、「皇帝のものも、平民のそれも、人間のあらゆる出来事が影響するという点において、同じ一つの生である et emperière, et populaire, c'est tousjours une vie que tous accidents humains regardent」[4]。この確信ゆえに、モンテーニュは自分の内側に目を向け、耳を傾けるのである。そして、自己に関する研究の呼び水となるのは、アポロンの忠告である。

> (b) L'advertissement à chacun de se cognoistre doibt estre d'un important effect, puisque ce Dieu de science et de lumiere le fit planter au front de son temple, comme comprenant tout ce qu ｖ il avoit à nous conseiller. (c) Platon dict aussi que prudence n'est autre chose que l'execution de cette ordonnance, et Socrates le verifie par le menu en Xenophon. (b) Les difficultez et l'obscurité ne s'aperçoivent en chacune science que par ceux qui y ont entrée. Car encore faut il quelque degré d'intelligence à pouvoir remarquer qu'on ignore, et faut pousser à une porte pour sçavoir qu'elle nous est close. (...)Ainsin en cette-cy de se cognoistre soy mesme, ce que chacun se voit si resolu et satisfaict, ce que chacun y pense estre suffisamment entendu, signifie que chacun n'y entend rien

du tout, (c) comme Socrates apprend à Euthydeme en Xenophon[5].
(b)「自分自身を知ること」という各人への忠告は重大な意味を持つものにちがいない。なぜなら、学問と陽光の神であるアポロンはこれを、我々に対して忠告すべきすべてを含むものとして、その神殿の正面に彫らせているからである。(c) プラトンも、思慮深さとはこの命令の実行にほかならないと言っているし、ソクラテスもこれをクセノフォンのなかで詳しく証明している。(b) それぞれの学問における難解さや晦渋さは、そこに入った者にしかわからない。というのも、自分が無知であることに気づくためには、ある程度の知性が必要であり、また、門が閉まっているのを知るためには、押してみる必要があるからだ。（中略）だから、自分自身を知るということにおいても、皆があれほど確信し、満足した様子で、十分にわかったようなつもりでいるのは、何もわかってないということを示している。(c) これはクセノフォンのなかでソクラテスがエウテュデモスに教えているとおりである。

デルフォイの忠告に関して、より具体的にモンテーニュが述べているのは、『エセー』第一巻 3 章「我々の感情は我々を超えていく」のなかの、(c) の加筆部分である。そこでは、デルフォイの言葉が「汝のことをなし、汝自身を知れ Fay ton faict et te cognoy」[6] という形で引用されている。そして、モンテーニュはこれに次のような解釈を加えている。

Qui auroit à faire son faict, verroit que sa premiere leçon, c'est cognoistre ce qu'il est et ce qui luy est propre. Et qui se cognoist, ne prend plus l'estranger faict pour le sien: s'ayme et se cultive avant toute autre chose: refuse les occupations superflues et les pensées et propositions inutiles[7].
自分のことをしようとする者は、第一の教訓が、自分が何であり、何が特質なのかを知ることだとわかるだろう。また、自分を知る者は、もはや他人のなすことを自分のものだとは思わずに、なによりも自分を愛し、磨きをかけ、余計な仕事や、無益な思考や計画を拒むのである。

モンテーニュは「汝のことをなせ」を自分の特質や特性を知ることとし、他方、「汝自身を知れ」を自分自身を磨くこと、つまり修練として解釈している。こうした解釈についてはのちに詳述するが、まず考えていきたいのは、次の三つである。「汝自身を知れ」という忠告に関しての知識を得たのはどこからか、つまりその典拠はなにかということ。次に、その忠告の後世への影響。最後に、これは典拠に付随した問題だが、「自分自身を知ること」、すなわち「自己認識」において、まず「自己」とは何であり、それを「知る」とはどのようなことを意味するのか、言い換えれば、「汝自身を知れ」という言葉の意味の解釈について、見ていきたいと思う。

2. 典拠

「汝自身を知れ」という格言は、ルネサンス期に広く読まれ、モンテーニュも所有していたエラスムスの『格言集』*Collectanea Adagiorum* にも収録されており[8]、この格言について言及する作品は、

デルフォイの神殿の神官であったプルタルコスを含め、プラトン、クセノフォン、ディオゲネス・ラエルティオスからキケロにいたるまで、モンテーニュが読みえたものだけでも多くある。

最初の引用文の典拠について、まずはヴィレーの注釈を参照しよう。テクストの階層区分における (b) の部分は、プルタルコス『モラリア』の「デルフォイのEについて」*De E apud Delphos* から引かれているのだという [9]。この作品は「レーモン・スボンの弁護」の最後でもパラフレーズしながら活用していたように、モンテーニュにとっては、とりわけ興味の引いたものだったといえよう。

次に、この引用の (c) では、プラトンとクセノフォンの作品 [10] への言及が認められる。まず、プラトンの作品群のなかで典拠として指示されているのは、エラスムスもその格言の説明の際に典拠としている、『カルミデス』である。

> σχεδὸν γάρ τι ἔγωγε αὐτὸ τοῦτό φημι εἶναι σωφροσύνην, τὸ γιγνώσκειν ἑαυτόν, καὶ συμφέρομαι τῷ ἐν Δελφοῖς ἀναθέντι τὸ τοιοῦτον γράμμα[11].
> なぜなら私自身の主張とは、思慮ある節度は、まさしく自分自身を知ることである、ということで、そのような意味の銘文をデルフォイの神殿に奉納した人に私は与するからです。

また、自分自身を知ることが思慮と強く結びつけられているのは、『ティマイオス』にも見つかる [12]。この二つがまさしくモンテーニュが上の引用文中で (c) の加筆の際、典拠としたものである。このプラトンのテクストが示しているのは、自分自身を知ることの実践とは、思慮にほかならない、ということである。

さらに、「ソクラテスがクセノフォンのなかで説明している」というのは、おそらく『ソクラテスの思い出』第四巻のことだろう [13]。ここでは、ソクラテスがエウテュデモスという人物に対し、君はデルフォイのあの言葉を真剣に受け止め、考えたことがあるか、と問いかけている。興味深いのは、モンテーニュが引用文のなかで、学問の難解さと類比的に語っていることだ。先に述べたように、モンテーニュは「自己」を探求の主題にすえた。それゆえ、自分自身を知ることは、モンテーニュにとっては、ほかのものと遜色のない、学問の一つなのである。さまざまある学問の難しさは、自分の無知に気づくだけの知性がある人にだけわかるものだ。それと同様に、自分を知ることの難しさも、これを行なってみて、自分について無知であることに気づいた人にしかわからない、ということが言われている。

プラトンがこの格言に触れている作品は他にもある。例えば、『パイドロス』にはソクラテスに、まだ自分はデルフォイの言葉にしたがって自分を知ることができていない、と告白させている [14]。ここでの「自分を知ること」とは、思慮や節度に関するものではなく、むしろ、自分の性質や特性について知ることと関わっているように思われる [15]。だが、「人間の本性について」という副題のついた『アルキビアデス第一』においては、自分自身を知ることと思慮の関係が強調されて

いる。この作品はモンテーニュも読んでいるが、どれほど影響を与えたかどうかについては、具体的にはわからない[16]。しかし、この作品はむしろキケロやプルタルコスといった作家たちに大きな影響を与えたのは確かなことだ。これについては、次に見ていくが、その前に、『アルキビアデス第一』の対話の重要な部分だけ紹介しておこう。

プラトンの作品のなかで、「アルキビアデス」という題のつく対話篇は二つある。そのうちの『アルキビアデス第二』は、「祈願について」という副題を持ち、偽作だと見なされている。いまから見ていく『アルキビアデス第一』は、真偽問題に関してシュライエルマッハー以来の論争があるものの、偽作だとする決定打に欠けるというのが現状である。他方で、古来からプロクロス[17]やオリュンピオドロス[18]によって注釈もなされていることから、その重要性がうかがえるだろう。

さて、内容についてだが、この対話篇は、絶世の美少年であり、家柄もこのうえなく恵まれ、財産も余りあるアルキビアデスが、アテネの民会に出ていって、政策について提言しようと意気込んでいるところに、ソクラテスが話しかけることからはじまる。対話の第一部（106c-119a）では、アルキビアデスが提言しようとしている事柄に関して、はたしてアルキビアデス自身はそれに精通しており、そのことに関して他の人々より優れているのか、と問われる。さらに、そうした事柄――主に政治と軍事――における「よりよさ」とは何か問われ、アルキビアデスは答えることができない。

続いての第二部（119a-124a）では、アルキビアデスは自分の無知について開き直る。つまり、自分と同様に他の人々も、軍事や政治に関して専門的な知識を持っていないのに、提言したりしているではないか、と主張する。ソクラテスはこの答えに対し、アルキビアデスの真の競争相手はアテナイ人たちではなく、ラケダイモンやペルシャにほかならないのだと諭す。さらに、アルキビアデスが誇るもの、つまり外見や家柄、財産などの「付属物」は、ラケダイモンの王やペルシャの王族たちのそれらと比べれば、卑小なものにすぎないことを強調し、ソクラテスは、アルキビアデスに残された方途が「心がけ（配慮）」と「知恵」であることを示す。

最後の第三部（124a-135e）では、ソクラテスがデルフォイ神殿の「汝自身を知れ」という言葉に言及し、アルキビアデスが政治や軍事において卓越性を発揮するうえで必要なのは、自己に配慮することである、と言う。そして、この「自己」とは何かという探求に着手し、それは自分自身に付属するもの（肉体）ではなく、またその肉体に付属するもの（靴や指輪など）でもないことが確認され、「自己」とは、そうしたものを使用するところの魂である、と結論される[19]。そして、「汝自身を知れ」というデルフォイの言葉が意味するのは、自分で自分自身をのぞき込むことである、と言う。これは眼の瞳と類比的に語られ、加えて、自分自身とは魂のことだというのは同意されていることから、自分自身を知るとは、魂で魂を見ること、と結論される。そして、魂のなかでも、知恵と思慮がある部分を見ることで、もっともよく自分自身を知ることになる。

τῷ θεῷ ἄρα τοῦτ᾽ ἔοικεν αὐτῆς, καί τις εἰς τοῦτο βλέπων καὶ πᾶν τὸ θεῖον γνούς, θεόν τε καὶ φρόνησιν, οὕτω καὶ

ἑαυτὸν ἂν γνοίη μάλιστα[20].
すると、魂のその部分は神に似ており、人はそれに見入って神的なものの全体、つまり神と思慮を認識するとき、自分自身を最もよく知ることができるだろう

この対話篇において重要なのは、次の二点である。すなわち、(i) 人間とは肉体ではなく、魂であること、(ii) 自分自身を知ること、つまり自己認識とは思慮・節度であること。

ここまでをまとめると、モンテーニュは「汝自身を知れ」の言葉を、1588 年の (b) のテクストであれ、(c) の加筆であれ典拠は具体的に挙げることができるが、プラトン、クセノフォン、プルタルコスといった複数のものから知ったということである。また同時に、モンテーニュが自分なりの解釈を加える以前に、すでにプラトンは、「自分自身を知ること」は思慮であることを強調しており、それが明確に打ち出されているのが、『アルキビアデス第一』という、モンテーニュも読んだ対話篇である。モンテーニュの解釈を見る前に、上のプラトンの考えが後世へ大きな影響を与えたことを次に確認したいと思う。

3. 影響

(i) に関して、アリストテレスは『ニコマコス倫理学』のなかで何度か言及しているが、キケロもまたその著作のなかで多く言及している[21]。アリストテレスは、魂の徳（アレテ ―）が肉体のそれよりも優れていることや、魂が肉体を動かすものである、という点において、プラトンの議論を引き継いでいる。他方、キケロにおいて、上の二点はより純粋な形で示されている。たとえば、哲学的著作のうちの一つである『トゥスクルム荘談論』においては、魂の不死を否定したエピクロス派に対する批判を行なう際に、プラトンを称揚し、魂の本質を探求しようという過程で、次のように言う。

est illud quidem vel maxumum animo ipso animum videre, et nimirum hanc habet vim praeceptum Apollinis, quo monet ut se quisque noscat. non enim credo id praecipit, ut membra nostra aut staturam figuramve noscamus; neque nos corpora sumus, nec ego tibi haec dicens corpori tuo dico. cum igitur “nosce te” dicit, hoc dicit: “nosce animum tuum.” nam corpus quidem quasi vas est aut aliquod animi receptaculum (...)[22].
しかし、魂で魂自体を見るということが最も重要なのであり、各人が自らを知るようにと忠告するアポロンの教えは、おそらくそういう意味に違いない。なぜなら、私が思うに、それは我々が自分の手足、身長、姿かたちを知るように、と教えるものではないからだ。我々とは我々の肉体ではない。こうして君に話しているとき、私は君の肉体に話しかけているわけではない。したがって「汝自身を知れ」と言うとき、それは、「汝の魂を知れ」と言っているのである。というのも、肉体はいわば魂の器ないし一種の避難所だからである。

ここはまさに、上で挙げた (i) の人間とは魂にほかならないことが明確に述べられている[23]。さらに、第五巻においては、「自己認識」が神を認識することにつながるというテーマが次の言葉のなかで見出される。

> haec tractanti animo et noctes et dies cogitanti existit illa a deo Delphis praecepta cognitio, ut ipsa se mens agnoscat coniunctamque cum divina mente se sentiat, ex quo insatiabili gaudio compleatur[24].
> こうした（自然学的な）事柄を扱い、昼夜を問わず考えている魂に、あのデルフォイの神によって知らされている教えが生まれる。すなわち、精神は自らを認識し、さらに神の精神とつながっていることを知覚するべきである、そしてそこから尽きることのない喜びで魂は満たされる、という教えである。

人間とは魂であり、デルフォイの忠告は魂を知れということを意味している。そして、人間精神は、自分の魂を認識することで、神の認識とつながりを持つようになる。キケロは比較的『アルキビアデス第一』の議論をそのままの形で引き継いでいると言える。

モンテーニュが親炙したプルタルコスはどうだろうか。『モラリア』のなかにある「月の表面に現れる顔について」という作品は、内容はその表題が示すように、天体に関する考察なのだが、そのなかで、プルタルコスは天体との類比で、人間についても言及する。その際、人間は複合的なものとして捉えられるが、魂と肉体というよく知られた二つから成るのではなく、「理性 νοῦς」がそこに付け加わる。さらに、この三つは互いに独立しており、下から、肉体、魂、理性の順に、より優れ、より神的であるというのが特徴的である[25]。ほかにも、プロティノスをはじめとする新プラトン主義者たちは、プラトンの他の著作とも混ぜ合わせながら、肉体に対する魂の優位性を強調する形で、受け継いでいく[26]。『アルキビアデス第一』の論点は、一方では肉体に対する魂の優位性という形で定着し、他方で「自分自身を知る」とは、いかなることなのかという問題はあまり深められてこなかったという印象である。

また、中世の「キリスト教哲学者 le philosophe chrétien」にとっても「汝自身を知れ」は重要である、とＥ・ジルソンは指摘する[27]。『創世記』[28] に依拠しながら、キリスト教哲学者たち、具体的には聖トマス・アクィナスや聖ボナヴェントゥラやドゥンス・スコトゥスなどは、神は人間を自分の似像として創造したので、人間は自己認識を通じて、神の認識に至る、とする。神の普遍的な自然本性は人間の自然本性を認識することによって、認識されうるのだ。ジルソンは次のように言う。

> Lorsque Socrate leur[=les Chrétiens] conseille de chercher à se connaître eux-mêmes, ce précepte signifie pour eux immédiatement, qu'ils ont à connaître la nature que Dieu leur a conférée et la place qu'il leur a assignée dans l'ordre universel, afin de s'ordonner à leur tour vers Dieu[29].

ソクラテスがキリスト教徒に「汝自身を知れ」と勧告するとき、この教訓は彼らにとって、すぐに、神が彼らに授けた自然本性と、神が普遍的秩序のうちに割り当てた地位を、今度は彼らが神へ向けて自分自身を秩序づけるために、知らなくてはならない、ということを意味している。

人間は、神の被造物として、世界の秩序のなかで自分がどのような地位にいるか自覚することが必要であり、そうすることで、人間の偉大さと惨めさの両方を知ることになる。最終的には、この自己認識によって、自分を創造した神の偉大さを知るのである。こうした考え方はモンテーニュのすぐ近くまで来ている。つまり、レーモン・スボンの『自然神学』である。自然が階梯的秩序をなしており、その頂点に立つ人間は、自分自身を知ることを通して、神の認識へと至る、というのは、スボンも主張していたことだ。だが、注意したいのは、やはりここでも重点は魂にあることだ。なぜなら、魂は「神の像の座 le lieu de l'image divine」(30) だからで、それゆえキリスト教哲学者たちは念入りにこれを研究したのだった。

「汝自身を知れ」はプラトンにおいても、キリスト教哲学においても、魂の研究に重点が置かれていることが以上からわかった。また、「自己認識」はプラトンにとっては思慮であり、キリスト教哲学にとっては神の認識につながるものであった。こうした思想潮流のなかで、モンテーニュはどのように自分なりの解釈あるいは思考を生み出したのか。

次に私たちは、まず、肉体と魂の関係についてモンテーニュがどのように考えているか見ていくことにし、その後、「自己認識」という難しい問題をモンテーニュが独創的な仕方で深めたことを示したいと思う。

4. 解釈①：魂か肉体か

プラトン以来、人間とは肉体ではなく魂であり、それゆえ、自分自身を知るとは、自分の魂を知ることにほかならないのだという解釈がなされてきた。

モンテーニュに関していえば、事態はまったく異なる。キケロやプルタルコスの作品にあれほど親しんでいるにもかかわらずである。つまり、モンテーニュは、人間とは魂にほかならない、とは考えないのである (31)。

魂と肉体を結び付けることに関しては、モンテーニュは早い段階からその重要性を説いていた。ただし、魂と肉体は同等には見られておらず、魂が肉体を導くという面が強調されてはいる。

Ceux qui veulent desprendre nos deux pieces principales et les sequestrer l'une de l'autre, ils ont tort. Au rebours, il les faut r'accoupler et rejoindre. Il faut ordonner à l'ame non de se tirer à quartier, de s'entretenir à part, de mespriser et abandonner le corps (...),mais de se r'allier à luy, de l'embrasser, le cherir, luy assister, le contreroller, le conseiller, le redresser et ramener quand il fourvoye, l'espouser en somme et luy servir de

mary[32]

我々の二つの主要な部分を分け、互いに離しておこうとする人々は間違っている。反対にこの二つを組み合わせ、結び付けなくてはならない。魂に命令して、ひとりで離れていかないように、自分だけ楽しまないように、肉体を軽蔑したり、見捨てたりしないように、むしろ、肉体と一緒になり、これを抱き、かわいがり、助け、調整し、助言し、歪みを正し、逸脱したら引き戻すように、要するに、肉体を妻とし、夫としての役目を果たすようにさせなければならない。

スクリーチが指摘しているように[33]、魂と精神の結びつきが語られるのは、レーモン・スボンの『自然神学』第 155 章においてである。スボンにとって魂は、神によって肉体に結び付けられており、そのつながりは驚くべきもので、かつ緊密なので、「まるで自然的な結合のように comme un naturel mariage」[34] なっているのである。ここで「結合」と訳した « mariage » はもちろん「結婚」と取ることもでき、ラテン語の原文においても « matrimonium » という「結婚」や「妻を娶ること」という語で書かれている。ここでは文脈に沿わせるために「結合」としたが、もちろんモンテーニュにとっては魂と肉体の「結婚」として受け止められただろう。これは、上の『エセー』からの引用がまさしく示しているとおりである。

そして、重要なのは次のスボンの一文である。

Et d'autant qu'elle[=l'ame] n'est pas l'homme toute seule, non plus que le corps, bien qu'elle en soit la partie principale, et que c'est le meslange d'eux-deux qui faict l'homme, (...)[35].

さらに、魂がそれだけで人間ではないし、ましてや肉体より優れているわけでもない。ただ、人間の主要な一部ではあるが。人間を成しているのは、その二つの混合なのである。

スボンの『自然神学』が禁書扱いとなったことの理由の一つに、こうした魂と肉体を同等のものとして見なす態度が挙げられるだろう。ここでは、魂はジルソンが言ったような、「神の像の座」ではないのだ。

ところで、魂が肉体を導き、人間はその二つの混合によってなっているという考え方は、スボンの『自然神学』にも多くを負っていると同時に、モンテーニュ自身が言うように、アリストテレスの考え方にも近い。これは魂の不滅性を主張したプラトン主義に対抗する考え方である。『エセー』第二巻 17 章「うぬぼれについて」において (c) の加筆で次のように言う。

(c)La secte Peripatetique, de toutes les sectes la plus civilisée, attribue à la sagesse ce seul soin de pourvoir et procurer en commun le bien de ces deux parties associées; et montre les autres sectes, pour ne s'estre assez attachées à la consideration de ce meslange, s'estre partializées, cette-cy pour le corps, cette autre pour l'ame, d'une pareille erreur, et avoir escarté leur subject, qui est l'homme, et leur guide, qu'ils advouent en general estre nature[36].

あらゆる学派のうちで最も洗練された逍遥学派は、この融合した二つの部分に共通な善を獲得できる

ことが、賢者にとって唯一の関心事だとした。そして、他の諸学派が、この混合について十分に考慮せず、あるものは肉体に、あるものは魂に偏っているために、それぞれ似たような誤りを犯していることを示した。さらに、彼らの主題である人間から離れ、また彼らが揃って案内人だと認める自然からも離れていることも示している。

アリストテレスの著作をモンテーニュは、『政治学』と『ニコマコス倫理学』を除いて、ほとんど読んでいないはずだと言われているが[37]、この部分はキケロ『善と悪の究極について』第四巻7章の16[38]に負っている。よって、諸学派といわれるのが、ストア派とエピクロス派であることがわかる。肉体を重視するのが後者であり、魂を重視するのが前者であることは言うまでもないだろう。モンテーニュは、魂を肉体の伴侶として、導くものだと見なしているが、これはアリストテレスの考えに沿うものである。

ところでモンテーニュは『エセー』第三巻13章の「経験について」において、自分の書いているものについて次のように言う

(b) En fin, toute cette fricassée que je barbouille icy n'est qu'un registre des essais de ma vie, qui est, pour l'interne santé, exemplaire assez à prendre l'instruction à contre-poil. Mais quant à la santé corporelle, personne ne peut fournir d'experience plus utile que moy, qui la presente pure, nullement corrompue et alterée par art et par opination[39].

要するに、ここに書き散らした寄せ集めは、私の生活において試したことの記録にすぎないし、精神の健康にとっては、これを逆の教訓にすると、十分なお手本となる。他方、肉体の健康にとっては、私より有益な経験を提供できるものはいない。私はこれを技巧や学説にとって汚したり、損なったりせず、純粋なまま示しているからだ。

ここで注目したいのは、自分が書いているものが「生活において試したこと des essais de ma vie」の記録だと、はっきり言っていることであり、そのうえ、それらが精神の健康には「十分 assez」であるが、他方、肉体のそれには、他人に負けることのないほどの有益である、と主張していることである。つまり、モンテーニュにとって『エセー』という著作は、肉体に関わる経験に関して自分の判断力を働かせたという意識があるのだ。ここから次のような考えが出てくる。すなわち、精神と肉体は分離しがたく、むしろお互いに結び付けてやるほうがよい。つまり、「精神は肉体の鈍重さを目覚めさせ、活気づけ、肉体は精神の軽薄さを抑え、落ち着かせなければならない Que l'esprit esveille et vivifie la pesanteur du corps, le corps arreste la legereté de l'esprit et la fixe」[40]という考えである。上で挙げた、魂が肉体を導くという考えとは全く反対に、ここでは肉体が精神（魂よりも広い意味。人間の思惟的部分を示している）を統制することにも触れられている。

プラトンの『アルキビアデス第一』が示すような、人間とは魂であり、肉体はその道具と見なす考え方は、人間を質料と形相の合体と見なすアリストテレスの、魂と肉体の結合という概念に

よって打ち消される。しかしそこでは、肉体はなおも魂に先導されるものであり、魂に優位性がある。モンテーニュはさらに進んで、このアリストテレスの定式――魂が形相であり、肉体が質料であること――を反転させる。T・ゴンティエが指摘するように、「肉体こそが、魂と、つまり人間全体のなかの個体に、その寸法を与えるものなのだ c'est le corps qui donne sa mesure à l'âme et donc à l'individu dans sa totalité」[41]。モンテーニュにとっては、人間とは肉体と魂の結合したものであり、同時に、肉体も魂に劣らず重要である。これは第三巻 5 章「ウェルギリウスの詩句について」における性に関するテーマや同巻 13 章において展開されている食欲、性欲、生活習慣、気候に対する体の反応などといった事柄をみれば一目瞭然である。モンテーニュにとって重点は肉体にある。なぜなら、「我々が関心を持つのは、いつも人間だが、その特性はきわめて肉体的なものである C'est tousjours à l'homme que nous avons affaire, duquel la condition est merveilleusement corporelle」[42] からだ。

5. 解釈②：記録すること

プラトンの初期対話篇において「思慮」は「自己認識」であり、同時に「節制」の意味も持つ。だがあくまで重要なのは「自己認識」であり、それはプラトンにおいては、社会のなかでの自分の位置を知ることなのである、とJ・アンナスは指摘する[43]。自分の社会的位置づけを知ることは、正義の本質とも関連する。それは、自分の果たすべきことをなし、同時に他者にもそのように行為する権利を認めるからである。各人が自分のつとめを果たすことで、国家、社会における調和が実現されるのである。したがって、「自分自身を知ること」とは、「思慮」であり、それは個人的な性格を知るといった類のものではなく、社会における自分の位置を見定め、自分が何を果たすべきか、そのためには何が自分には欠けているかなどを認識することなのである。

こうしたアンナスの指摘は、プラトンの『アルキビアデス第一』とクセノフォンの『メモラビリア』第四巻が類似していることに由来するかもしれない。『メモラビリア』第四巻において、ソクラテスとエウテュデモスが対話を交わす。エウテュデモスは、成年に達したら民会に出て、国事に関して建言しようと意気込んでいる若者である。ソクラテスはこの若者と国事を行なう人間に相応しい能力や仕事について議論する。この状況はプラトンの『アルキビアデス第一』のアルキビアデスと全く同じである。一つの事柄に関して、精通している人間が専門家であり、国事に関しても同様に、立派なこと、善なること、正しいことに通じている人間が行なうべきである、という見解が議論のなかで導きだされる。だが、決定的な相違点がある。それは「汝自身を知れ」の解釈をめぐる対話の目的である。

たしかに、「自分自身を知ること」、すなわち「自己認識」は、アルキビアデスにとっても、エウテュデモスにとっても、政治と軍事において、自分の能力を最大限発揮するために必要である。

これはアンナスの指摘する通りであり、クセノフォンの議論の意味するところでもある。しかし、ソクラテスが対話する目的が、プラトンのそれと、クセノフォンでは異なるのである。どういうことかといえば、プラトンにおけるソクラテスは、対話を通じて、アルキビアデスの無知を明らかにし、正義と思慮ないし節度の徳を身に着けるために邁進するよう促す。これは「エレンコス elenchos」[44] という無知を明らかにする論駁であり、同時に「プロトレプティコス・ロゴス」[45] という徳の探求を促す議論であると言える。ゆえに、ここでの自己認識は、アンナスの指摘するような社会的な意味より、いままで配慮してこなかった自分の魂を知り、その魂の善を目指すことに重点が置かれる。

他方で、クセノフォンにおけるソクラテスは、より世俗的に、対話を通じて、エウテュデモスの能力と適性を吟味しているのである。ここでは、政治と軍事において何が有用であるかが問題であり、自分自身を知る者は、自分に相応しいものごとを知り、自分の能力を正しく見極める。その結果として、物事をあやまたず行ない、名を成し、栄誉を得るのだ。つまり、クセノフォンにおける自己認識とは、自分に固有の「力 dunamis」を把握し、それにしたがって振舞うことである [46]。

ところでモンテーニュが直接的に参照した『ティマイオス』の該当箇所 [47] はどのように解釈されているだろうか。ここでは二つのことが言われている。まず、「自分自身の事柄をなすこと」、そして「自分自身を知ること」である。テイラーの注釈によれば、ここでは『カルミデス』における議論が下敷きとしてあり、そこでは、「自分自身を知る」とは、自分の弱みや強みについて正しく判断すること、とされており、さらに、デルフォイの神殿はこの格言を掲げることで、参拝者に挨拶を送っているのだと言われている。これはどのような挨拶かといえば、「思慮の健全さがあなたにありますように」というものであり、したがって、「自己知」とは「思慮の健全さ」を持つことだとされる。テイラーの説明によれば、『ティマイオス』において、「自分自身の事柄をなすこと」と「自分自身を知ること」の結合がなされているのだという [48]。また、他の英訳において『ティマイオス』のこの箇所は、« to act and to be the judge of his own actions and of himself »[49] となっており、「自己認識」とは、自分の行為と自分自身の判定者となることだと解すことが可能である。

以上のような「自己認識」の諸解釈とは全く異なる方向にモンテーニュは進んでいく。彼の独自性はすでに 1580 年の初版の時点で明らかである。モンテーニュは、自分の内部に目を向け、そこに据え付け、思うがままにさせておくのだと言っている [50]。そして、第三巻 9 章の最後におけるデルフォイの命令を説明する箇所おいても同様に、「お前の内を見よ、お前を認識せよ、お前を考えよ Regardez dans vous, reconnoissez vous, tenez vous à vous」という命令からはじめ、「自分に集中し、支えよ appilez vous, soutenez vous」という。これはテクストの階層を見る限り、モンテーニュにとって一貫した考えであることがわかる。ここからわかるのは、モンテーニュにとっての「自己認識」が、決して社会における自分の役割を知ることでもなければ、節度と関連するようなモラルの問題でもなく、政治や軍事における能力と適性を知ることでもないことだ。むしろ、モンテー

ニュにとっては、「自己認識」とは行為にほかならず、かつ現在進行形のものなのだといえる。興味深く、同時に重要な要素が次の一文にある。

> moy, je regarde dedans moy: je n'ay affaire qu'à moy, je me considere sans cesse, je me contrerolle, je me gouste[51].
> 私は私の内部を見つめる。私は自分にしか用事がない。私はたえず自分を考え、記録し、味わう。

自分の内部を見つめることや自分自身の事柄に集中することに加えて、注目したいのは「私は自分を記録する je me contrerolle」という部分である。これはすぐに、第三巻 2 章「後悔について」の次の箇所を想起させる。

> C'est un contrerolle de divers et muables accidens et d'imaginations irresolues et, quand il y eschet, contraires (...)[52].
> これは様々に変化する出来事と優柔不断な、ときには相反するような思考の記録である。

モンテーニュは人間をつくるのではなく、語るだけであるが、それは「きわめて形の悪い個人 un particulier bien mal formé」[53] を描くことである。これはすでに出来上がったものであり、もはや変えようはないし、そうしようとも思わない。とにかく、ここに語られたことに嘘はないのである。この「記録 un contrerolle」こそが、自分の内部を見つめ、調べた結果、つまり「自己認識」の結果なのである。その証拠が第二巻 18 章「嘘をつくことについて」における次の (c) の加筆である。

> Et quand personne ne me lira, ay-je perdu mon temps de m'estre entretenu tant d'heures oisifves à pensements si utiles et aggreables? Moulant sur moy cette figure, il m'a fallu si souvent dresser et composer pour m'extraire, que le patron s'en est fermy et aucunement formé soy-mesmes. Me peignant pour autruy, je me suis peint en moy de couleurs plus nettes que n'estoyent les miennes premieres. Je n'ay pas plus faict mon livre que mon livre m'a faict, livre consubstantiel à son autheur, d''une occupation propre, membre de ma vie (...)[54].
> たとえ誰も私を読んでくれなくても、私がこれほど多くの余暇の時間に、かくも有益で愉快な思索をめぐらしたことは、時間の空費だろうか。私は自分の型をとってこの像を作りながら、自分の姿を取り出すために、かくもしばしば自分を整え、取り繕わねばならなかった。その結果、原型がおのずから固まって、ある程度まで形が出来た。他人のために自分を描きながら、私は初めのころの自分よりも鮮明な色合いで自分を描いた。私が自分の書物をつくったというよりは、私の書物が私をつくったのである。この書物は著者である私と同質のもので、私だけに関するもの、私の生活の一部をなすものである。

まず「多くの余暇の時間 tant d'heures oisifves」、これはまさにラテン語の「閑暇 otium」のことであり、つまり、モンテーニュが裁判官の職をひとに譲り、「書斎 la librairie」へと引退した後の時間を示している。その書斎で、多くの書物を手に取り、読むうちに、「自分」を主題としてなにか書いて

みようと思い立ったのだ。自分について書くためには、自分が何であり、どんな特質をもっているか知ることが必要である。そのために自分自身の姿をかたどり、描く。そして、自分に愛情をかけ、磨いていくうちに、おのずから形を成してきたのだ。それこそが「私の書物」、つまり『エセー』であって、「汝のことをなせ」と「汝自身を知れ」という二つの忠告のモンテーニュ独自の解釈と一致するのである。

おわりに

以上のことからわかるように、モンテーニュにとって「自分自身を知ること」とは、「自分を描くこと」という行為であり、社会における自分の役割を知ることや、自分に欠けているものを認識し、訓練するといったプラトン＝ソクラテス的なものでも、自分の能力や適性を正しくはかり、名声や栄誉を目指すクセノフォン＝ソクラテス的なものでもない。人間を魂と肉体の結合とする見方をスボンから受け継いではいるものの、自己認識が神の認識へとつながるとは考えず、自分の肉体的な事柄に重心を置き、それらを描くことで、モンテーニュは彼自身の「自己認識」を行なったのである。このように、キリスト教の伝統を受け継ぎながらも、古典古代の知恵を十分に享受し、そこから自分なりの解釈を試みたことこそ、『エセー』の見事な特色の一つであるといえるだろう。

注

(1) テクストは *Les Essais*, édition conforme au texte de l'Exemplaire de Bordeaux, éd. P. Villey et V.-L. Saulnier, Paris, PUF, « Quadrige », 2004 (1re éd. 1924) から引用し、訳をつける。引用の際、「レーモン・スボンの弁護」からのものは、ARS. ページ数、というように表わし、それ以外は、巻、章、ページ数、の順で表記する。また、テクストの階層区分として、(a) は 1580 年版のものを、(b) は 1588 年版のものを、そして (c) は 1592 年までの加筆であり、「ボルドー本」に基づくものを示している。なお、1595 年版も適宜参照した。*Les Essais*, édition réalisée par Denis Bjaï, Bénédicte Boudou, Jean Céard et Isabelle Pantin, sous la direction de Jean Céard, 3 vol., Le Livre de Poche, « Classiques », 2002; *Les Essais*, texte établi et annoté par Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simonin, 1 vol., « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Gallimard, 2007.　また「汝自身を知れ」というテーマの古代から中世までの伝達と解釈については、Pierre Cowrcelle, *Connais-toi toi-même, De Socrate à Saint Bemard*, Paris, Études augustiniennes, 1974-1975.

(2) voir M. A. Screech, *Rabelais*, New York, Cornell University Press, Ithaca, 1979, pp. 122-124（『ラブレー笑いと叡智のルネサンス』、平野隆文訳、白水社、2009、pp. 259-263）. また、スクリーチの論旨は次の二つを見るとより明確になる。François Rablais, *Les Almanachs pour l'an 1535*, in *Pantagrueline Prognostication pour l'an 1533*, textes établis, avec introduction, commentaires, appendices et glossaires par M. A. Screech, TLF, Paris-Genève, Droz, 1974; *Annotationes in Lucam*, 12-29. in *Opera omnia Desiderii Erasmi*

Roterodami: recognita et adnotatione critica instructa notisque illustrata, Amsterdam : North-Holland, 1969-, Ordinis sexti, tomus quintus, p. 550. モンテーニュと同時代の『形而上学』への注釈は次のものを見よ。Petrus Fonseca, *Commentariorum in Metaphysicorum Aristotelis Stagiritae libros*, Hildesheim, G. Olms, 1964.

(3) *Les Essais*, III, 13, p. 1072.

(4) *Ibid*., p. 1074. また、III, 2, p. 805, « On attache aussi bien toute la philosophie morale à une vie populaire et privée que à une vie de plus riche estoffe: chaque homme porte la forme entiere de l'humaine condition ».「徳に関するあらゆる哲学は、平民の私的な生活にも、それよりも豊富な生活にも、同じように当てはまる。各人は人間の特性の完全な形を身にそなえているのだ」。ところで、« l'humaine condition » に関する解釈については次のものがある。André Tournon, « Le grammairien, le juriconsulte, et l'"humaine condition" », in *Bulletin de la Société des Amis de Montaigne*, nº 21-22, 1990, pp. 107-118; J.-Y. Pouilloux, « La forme maîstresse », in Montaigne et la question de l'homme, éd., M.-L. Demonet, Paris, PUF, 1999, pp. 35-45; Michael A. Screech, *Montaigne and melancholy*, London, Duckworth, 1983, surtout ch.14 et 15, pp. 100-113.

(5) *Les Essais*, III, 13, p. 1075.

(6) *Les Essais*, I, 3, p. 15.

(7) *Ibid*.

(8) *Opera omnia Desiderii Erasmi Roterodami*, Ordinis secundi, tomus secundus, pp. 117-120. また、Érasme de Rotterdam, *Les Adages*, sous la direction de Jean-Chiristophe Saladin, Paris, Les Belles Lettres, 2013, vol. 1, pp. 477-478, no. 595 も参照した。なお « γνῶθι σεαυτόν» というギリシャ語を « Nosce te ipsum » というラテン語の形で広く知らしめたのも、エラスムスである。

(9) *Les Essais*, éd. P. Villey et V.-L. Saulnier, *op. cit*., « Appendice II », p. 1312; プレイアード新版 *Les Essais*, texte établi et annoté par Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simonin, *op. cit*., « notes et variantes », p.1836.「デルフォイの E について」392a において、デルフォイの「汝自身を知れ」という言葉は、いわば訪れる者に対する挨拶として掲げられているのだ、とされている。また、プラトン『プロタゴラス』343a-b では、この銘文はギリシャの七賢人によって奉納された、と言われている。

(10) クセノフォン『ソクラテスの思い出』がどれほどモンテーニュに影響を与えたかについては、次の論文を参照。Cf. Louis-André Dorion, « Le Socrate de Xénophon dans les Essais de Montaigne », in *Le Socratisme de Montaigne*, études réunis par Thierry Gontier et Suzel Mayer, Paris, Classiques Garnier, 2010, pp. 19-37. この論文は、モンテーニュが描くソクラテス像が、どの点においてクセノフォンに負っていて、どの点ではそうでないかを文献学的に示している。また、Villey-Saulnier 版や Pléiade 新版の注釈の不十分さを指摘し、正確な典拠を挙げるなど、非常に有益である。また同著者の *L'Autre Socrate : Études sur les écrits socratiques de Xénophone*, Les Belles Lettres, 2013. はクセノフォンの作品におけるソクラテスについて考察した集大成であり、上に挙げた論文はここにも収録されている。モンテーニュが読んだクセノフォン全集はセバスチャン・カステリヨンによる編集で 1551 年に出版された、ベッサリオンのラテン語訳である。なお、『エセー』のなかで、一番言及が多いのは、『キュロス王の教育』の 23 回であり、『ソクラテスの思い出』は二番目の 18 回である。Cf. *Les Essais*, éd. P. Villey et V.-L. Saulnier, *op. cit*., « catalogue des livres de Montaigne », p. LXXI, n. 2.

(11) *Charmides*, 164d, in Plato, *Platonis Opera*, ed. J. Burnet, Oxford University Press, 1900-1907.

(12) *Timaeus*, 72a, *ibid*., « ἀλλ᾽ εὖ καὶ πάλαι λέγεται τὸ πράττειν καὶ γνῶναι τά τε αὑτοῦ καὶ ἑαυτὸν σώφρονι μόνῳ προσήκειν. »「むしろ昔からよく言われているとおり、自分自身の事柄をなし、自分自身を知ることは、

思慮ある人にのみふさわしいのである」。この部分は二番目に引用した、『エセー』第一巻三章の直接の典拠である。繰り返しになるが、モンテーニュは自分なりの解釈を加えているのは、明らかである。

(13) Xenophon, *Memorabilia*, in *Xenophontis opera omnia*, vol. 2, 2nd edn. Oxford, Clarendon Press. 1921 (repr. 1971), 4, 2, 25, « πότερα δέ σοι δοκεῖ γιγνώσκειν ἑαυτόν, ὅστις τοὔνομα τὸ ἑαυτοῦ μόνον οἶδεν, ἢ ὅστις, (...) ἑαυτὸν ἐπισκεψάμενος, ὁποῖός ἐστι πρὸς τὴν ἀνθρωπίνην χρείαν, ἔγνωκε τὴν αὑτοῦ δύναμιν; »「自分自身を知るというのはどちらだと君は思うか、つまり自分の名前を知っているだけの人なのか、それとも、人間に関する必要事に対して、自分はどのような者であるかじっくりと自分自身を調べ、自分の能力を知った人なのだろうか」

(14) *Phaedrus*, 229e-230a, in Plato, *op. cit*., « οὐ δύναμαί πω κατὰ τὸ Δελφικὸν γράμμα γνῶναι ἐμαυτόν: γελοῖον δή μοι φαίνεται τοῦτο ἔτι ἀγνοοῦντα τὰ ἀλλότρια σκοπεῖν. (...) σκοπῶ οὐ ταῦτα ἀλλ᾽ ἐμαυτόν, εἴτε τι θηρίον ὂν τυγχάνω Τυφῶνος πολυπλοκώτερον καὶ μᾶλλον ἐπιτεθυμμένον, εἴτε ἡμερώτερόν τε καὶ ἁπλούστερον ζῷον, θείας τινὸς καὶ ἀτύφου μοίρας φύσει μετέχον. »

「私はまだ、デルフォイの言葉に従って自分自身を知ることができていないのだ。それがまだできていないのに、自分に関係ないことの探索をするなんて、実に滑稽なことだと私には思われるのだ。（中略）だから、私はそういったことではなく、自分自身について、ひょっとすると怪物のテュポーンよりも複雑で凶暴な野獣なのか、それとも、生まれつき控えめで何か神的な性分に与っていて、より温厚で単純素朴な生き物なのか、といったことを探求しているのだ」

(15) ほかにも、あえて引用はしないが、*Philebus* 48c; *Loix* XI 923a; *Protagoras* 343a-b; 偽作説が有力な *Hipparchus* 228e; *Rivaux* 138a などがある。しかし、これらの対話篇においては、自己認識と思慮が結び付けられることはなく、単なる言及程度にとどまっている。

(16) モンテーニュとプラトンについては、ヴィレーの研究 Pierre Villey, *Les Sources et l'évolution des «Essais» de Montaigne*, 2vol., New York, B. Franklin, 1968, tome 1, pp. 192-193 や、*Montaigne et la Grèce*, actes du colloque de Calamata et de Messène, 23-26 septembre 1988, présentés par Kyriaki Christodoulou, Paris, Aux Amateurs de Livres, 1990 に収められている、Jean Céard, « Montaigne et la politique de Platon », pp. 45-55; G. Mallary Masters, « Montaigne platonicien? », pp. 56-63 などがある。

(17) Plocrus, *Sur le premier Alcibide de Platon*, texte établi et traduit par A. Ph. Segonds, Paris, Les Belles Lettres, 1985-1986.

(18) Olympiodorus, *Commentary on the First Alcibiades of Plato*, critical text and indices by L. G. Westerink, North-Holland, 1956.

(19) *Alcibiades* 1, 130e, in Plato, *op. cit*., « ψυχὴν ἄρα ἡμᾶς κελεύει γνωρίσαι ὁ ἐπιτάττων γνῶναι ἑαυτόν. »「それでは、自分自身を知れと指示する者は、我々に魂を知れと命じているわけだ」

(20) *Ibid*., 133c.

(21) ここから Jean Pépin, *Idées greques sur l'homme et sur Dieu*, Paris, Les Belles Lettres, 1971. を参照しながら、『アルキビアデス第一』の論点がどのように継承されたか見ていく。『ニコマコス倫理学』における言及は、pp. 82-83, n.1, 2, 3, 4 et 1, 2 を参照のこと。

(22) M. Tullius Cicero, *Tusculanae Disputationes*, ed. M. Pohlenz, Leipzig, Teubner, 1918, 1, 22, 52.

(23) また、『国家について』の第六巻、いわゆる「スキピオの夢」では、第三次ポエニ戦争において、カルタゴ遠征を率いるスキピオ・アエミリアヌス（小スキピオ）の枕元に、第二次ポエニ戦争で活躍した祖父スキピオ・アフリカヌス（大スキピオ）が立ち、孫に語りかけるという体裁が取られ、主

題はプラトンの著作（『ティマイオス』や『パイドロス』）を下敷きにした宇宙論が展開されているが、そのなかで、次のような言葉がある。M. Tullius Cicero, *De Republica*, ed. C. F. W. Mueller, Leipzig, Teubner, 1889, 6, 24, 26, « Tu vero enitere et sic habeto, non esse te mortalem, sed corpus hoc; nec enim tu is es, quem forma ista declarat, sed mens cuiusque is est quisque, non ea figura, quae digito demonstrari potest »「お前は確かに努力するように。そして死すべきものはお前ではなく、肉体であることを心得よ。事実、その形が表すものはお前ではなく、各人の精神こそが各人なのであり、それは指で指し示すことのできるものではないのだ」。

(24) *Tusculanae Disputationes*, *op. cit*., 5, 25, 70.

(25) Plutarch, *De faciae quae in orbe lunae apparet*, ed. Gregorius N. Bernardakis, Leipzig, Teubner, 1893, 943a, « τὸν ἄνθρωπον οἱ πολλοὶ σύνθετον μὲν ὀρθῶς, ἐκ δυεῖν δὲ μόνων σύνθετον οὐκ ὀρθῶς ἡγοῦνται: μόριον γὰρ εἶναί πως ψυχῆς οἴονται τὸν νοῦν, οὐδὲν ἧττον ἐκείνων: ἁμαρτάνοντες, οἷς ἡ ψυχὴ δοκεῖ μόριον εἶναι τοῦ σώματος: νοῦς γὰρ ψυχῆς ὅσῳ ψυχὴ σώματος, ἄμεινόν ἐστι καὶ θειότερον ».「多くの人々が、人間とは複合的であると思っているのは正しいが、二つの部分から成るものだと思っているのは間違いである。というのも、彼らは理性が魂のなんらかの部分であると考えているからであるが、それは、魂が肉体の部分であると思っている人々と同様に間違っていることだ。なぜなら、魂が肉体に対してそうであるように、理性は魂よりも優れており、より神的であるからだ」

(26) Jean Pépin, *op. cit*., pp. 92-114.

(27) Étienne Gilson, *L'esprit de la philosophie médiévale*, Paris, J. Vrin, 2. éd. rev., 1944, ch. XI, pp. 214-233.

(28) Cf. ウルガタ版 *Genesis*, ch. 1, 26-27, « et ait faciamus hominem ad imaginem et similitudinem nostram (…) creavit Deus hominem ad imaginem suam ad imaginem Dei creavit illum (…). »「神は『我々の像と似姿にしたがって人間をつくろう』と言った。（中略）神は自分に像にしたがい人間をつくり、神の像にしたがってそれ（人間）をつくったのだ（後略）」。動詞 « facio » が一人称複数形であり、人称代名詞対格も « nostram » となっているが、キリスト教の文脈を考慮して、一人称単数形で訳した。「威厳を示す複数形」だと言われているが、この複雑な問題に立ち入ることはしない。

(29) É. Gilson, *op. cit*., p. 219.

(30) *Ibid*., p. 233.

(31) モンテーニュがプラトンとは異なり、肉体的なものに注意を向けることは、次の論文においても指摘されている。Emiliano Ferrari, « Montaigne et la connaissance de soi », in *Le Socratisme de Montaigne*, *op. cit*., pp. 189-201, surtout pp. 192-194. また、モンテーニュが肉体や動物性に価値を置くことについては、Thierry Gontier, *De l'homme à l'animal. Paradoxes sur la nature des animaux : Montaigne et Descartes*, Paris, Vrin, 1998, pp. 131-146. を参照すること。

(32) *Les Essais*, II, 17, p. 639.

(33) M. A. Screech, *op. cit*., pp. 114-117.

(34) R. Sebon, *Théologie naturelle* I, ch. 155, in *Œuvres complètes de Michel de Montaigne*, publiées par le Dr. A. Armaingaud, Paris, 1932, t. IX, p. 266.（モンテーニュによる仏訳）。なおスボンの原文はインターネット上のサイトから閲覧可能（1635 年にロンドンで出版されたもの）。 EEBO Early English Books Online,（http://eebo.chadwyck.com/search/full_rec?SOURCE=pgimages.cfg&ACTION=ByID&ID=V183799）（2017 年 12 月 1 日閲覧）。原文では « [Deus] fecit quoddam naturale matrimonium inter ea[copus et animam] »「神が魂と肉体のあいだに、なんらかの自然的な結合をなしたのだ」（p. 255）。なお、Villey-Saulnier 版

« Appendice II », p. 1278 では、「肉体と魂の結合のイメージはスボンの『自然神学』のなかで何度も見られる」とし、具体的な箇所は指示していない。ところが、プレイアード新版 « Notes et variants », p. 1644 では、この典拠を第 135 章だとしている。しかし、ここでは「第一に愛されるもの la chose premierement aymee（原文では « res primo amata »）」と「我々の意志 nostre volonté（原文では « voluntas »）」のつながりが、結婚の比喩――前者が夫で後者が妻――によって語られているだけであり、決して「肉体」と「魂」について語られているわけではない（モンテーニュの仏訳は pp. 230-231. 原書ページは pp. 219-221.）。また、Le Livre de Poche 版（*Les Essais*, édition réalisée par Denis Bjaï, Bénédicte Boudou, Jean Céard et Isabelle Pantin, sous la direction de Jean Céard, 3 vol., Le Livre de Poche, « Classiques », 2002.）では、スボンが魂と肉体の結合を重要視していると指摘し、例として第 104 章を示している（Livre deuxième, p. 480, n. 7.）。

(35) *Ibid*., p. 267.

(36) *Les Essais*, II, 17, pp. 639-640.

(37) Pierre Villey, *op. cit*., tome 1, pp. 67-69. またモンテーニュとアリストテレスについての研究はそれほど多くない。Ian Maclean, *Montaigne philosophe*, Paris, PUF, 1996; Edilia Traverso, *Montaigne e Aristotele*, F. Le Monier, 1974; Philippe Desan, « Le tintamarre de tant d'oreilles philosophiques. Montaigne et Aristote », in *Montaigne et la Grèce*..., éd. cit., pp. 26-33.

(38) M. Tullius Cicero, *De Finibus Bonorum et Malorum*, ed. Th. Schiche, Leipzig, Teubner, 1915, liber quartus, sec. 16, « idemque diviserunt naturam hominis in animum et corpus. cumque eorum utrumque per se expetendum esse dixissent, virtutes quoque utriusque eorum per se expetendas esse dicebant (...)»「さらに、彼ら（クセノクラテスとアリストテレス）は人間の自然本性を魂と肉体に分けた。そしてそれらの両方とも、それ自体によって追求されるべきものだと主張し、それゆえ、両者それぞれの徳もそれ自体によって、追求されるべきものだと、彼らは主張していた」。クセノクラテスは学園アカデメイアの第三代学頭。

(39) *Les Essais*, III, 13, p. 1079.

(40) *Ibid*., p. 1114.

(41) Thierry Gontier, *op. cit*., p. 143. 強調は著者によるもの。

(42) *Les Essais*, III, 8, p. 930 (b). ここで「肉体的」としたのは、この (b) のはじめの文が « Les sens sont nos propres et premiers juges, qui n'apperçoivent les choses que par les accidens externes; »「感覚は我々の固有かつ最初の判断であり、事物を外的な付帯性によってしか知覚しない」とであることから、人間の感覚が話題となっている、と判断したからである。「物質的」という訳語を当てている翻訳もあるが、「からだ corps」という語の派生語であることを考慮し、「肉体的」とした。

(43) Julia Annas, « Self-Knowledge in Early Plato », in *Platonic Investigations (Studies in Philosophy and the History of Philosophy, 13)*, edited by Dominic J. O'Meara, 1985, pp. 111-138. ここで取り上げられている対話篇は、『カルミデス』、『アルキビアデス第一』、『恋がたき』の三つである。

(44) Cf. ミヒャエル・エルラー『プラトン』、三嶋輝夫ほか訳、講談社、2015、pp. 167-170.

(45) Cf. 田中美知太郎「プロトレプティコス」、『田中美知太郎全集』第五巻所収、pp. 206-281、筑摩書房、1969；廣川洋一『キケロ『ホルテンシウス』――断片訳と構成案』、岩波書店、2016.

(46)『アルキビアデス第一』と『メモラビリア』の類似に関しては、Louis-André Dorion, « Qu'est-ce que vivre en accord avec sa *dunamis*? », in *L'Autre Socrate*, *op. cit*., pp. 247-274; Xénophone, *Mémorables*, texte

établi par Michele Bandini et traduit par Louis-André Dorion, Paris, Les Belles Lettres, 2011, tome II-2, *Livre IV*, « Notes complémentaires », pp. 86-93; Plato, *Alcibiades*, ed. and trad. by Nicholas Denyer, Cambridge University Press, 2001, p. 83. また、クセノフォンに出てくる「力に見合った kata dunamin」については Alain Legros, « “Selon qu’on peut” : tel était le “refrein” de Socrate », in *Le Socratisme de Montaigne*, *op. cit*., pp. 337-352.

(47) Timaeus, 72a, « ἀλλ᾽ εὖ καὶ πάλαι λέγεται τὸ πράττειν καὶ γνῶναι τά τε αὑτοῦ καὶ ἑαυτὸν σώφρονι μόνῳ προσήκειν. »「むしろ昔からよく言われているとおり、自分自身の事柄をなし、自分自身を知ることは、思慮ある人にのみふさわしいのである」。

(48) A. E. Taylor, *A commentary on Plato’s Timaeus*, Oxford, Clarendon Press, first published 1928, reprinted 1962, 1972, pp. 513-514.

(49) *The Timaeus of Plato*, edited with intro. and notes by R. D. Archer-Hind, London, Macmillan, 1888, p. 267.

(50) *Les Essais*, II, 17, p. 657, « je replie ma veue au dedans, je la plante, je l'amuse là ».

(51) *Ibid*.

(52) *Ibid*., III, 2, p. 805.

(53) *Ibid*., III, 2, p. 804.

(54) *Ibid*., II, 18 p. 665.